

雪もよひ

宿の老人の客が貸してくれた講談本を、退屈まぎれに読みだすと、彼は、知らず／＼興味にひかれて読みつゞけてしまった。昼飯をすませてから、たてつゞけに二冊を貪り読んで、三冊目にとりかゝった時、茶道具を洗ひに来た女中に笑はれて、彼は初めて炬燵を離れて、忘れてゐた午後の温泉に浸りに部屋を出た。

暮の迫つた山の温泉宿は、めつきり人影が疎らになつてゐた。今日も朝から、来るたびに湯壺の中は彼一人きりだった。深い湯壺に沈みながら、彼は珍しさうに毎日見古した天井を仰いだ。そして頸の根が痛くなるまで天井を眺めながら、いま読んだ講談の中の毒婦の事を想つたり、小判の音を想つて見たりした。「御免下され」と、渋い声で、病みさらばへた浪人者が、手拭を下げて仕切の破目板の陰から出て来さうな気がした。「さあ、さあ。どうもお寒いことで……」彼は湯壺の中から、浪人の影へ愛想よく声をかけやうとさへした。

それほど今日の彼は珍しく閑かな心持になつてゐた。この頃しきりに覚える何とない憔悴の念さへすつかり忘れきつてゐた。疲れきつた心身を、この世の中から封じこめてしまふやうに、彼がこの山の中の古びつくした温泉に籠つてから、すでに三月に近い時日が過ぎてゐた。いま一度、元通りの自分になりたいたばかりに、淋しさも退屈さも、じつと怵へてはゐるもの、結局

は失意の底にゐる彼には、まだ／＼消え去りかねる覇氣を胸に秘めて、かうして何の刺戟もない山の中に籠つてゐるのは、やはり尠からぬ苦痛にはちがひなかつた。昨日は宿の者が彼の部屋の障子を張代へて行つた。下働きの小女も、遠い宿場から来る用達の男にお白粉の買物を頼んだと喜んでゐた。かうして暦日ないさまの山の中にも、やはり山の中なりに新らしい年が来れば、迎年の用意があつた。彼には、何日再び世の中へ出て行く用意の何一つも出来てゐない彼には、眼の前にまた一つ新年の来ることにも、何かなし憔悴の念ひがあつた。

程よく温まつた彼は、安らかな心で湯壺を出た。部屋へ戻り際に、廊下の高窓から覗くと、裏の孟宗藪が、冷えきつた曇り空の下に、怖ろしいほど静まりかへつてゐた。その静けさは、何かきつかけがあれば、一齋にたちさはぐ用意のやうにも見え、じつと眺め入る彼の眼には、葉さきの揺れ一つ見現し得なかつた。彼はこの一刻一刻に長い時の歩みを感じた。

彼はまた炬燵に入つて、講談を読みだした。気がつくと、疎らな髯が自分のびてゐた。この宿の客のために、何処か遠い村里から道具箱をさげて廻つて来る床屋が一度休んだので、薄い彼の髯もいつか眼立つほどのびて来た。彼は小鋏を出して、講談本の上で手さぐりに髯をつみだした。短かい髯が赤ちやけた本の上には／＼落ちた。今日の彼には、こんなわびしい音も、却つて自分にふさはしいもの、やうに嬉しく思へた。

部屋の中が急に暗くなつて来た。彼はこのまゝ、夕飯まで炬燵